

新たな可能性 検討深める 柵の姿

佐川正敏氏
 それでは、ここから意見交換を進めていきたい。

まず縦街道南区域に、最も古い11世紀の四面廂

付の中心的建物がある。また、鳥海区域では中心的な建物が棟見つかり、原添下区域のL字の堀で囲まれた内部では、鳥海柵跡でも最大

な四面廂付建物が発見されている。これまでは、縦街道南区域から10年単位ぐらいで中心的建物の場所を鳥海区域に移し、前九年合

戦の段階で原添下区域に人工的な堀をさらに加えて、その中に建物を造った。時間的に中心的な場所が移っていったのではないかと考えてきた。

ところが、一つの可能性として千田嘉博先生が、前の建物を残しつつ、全体の広い範囲を城郭として安倍氏だけでなく、郎党なども含め同時に使っていた可能性を提言された。あくまで一つ

の可能性だが、これについて高橋学さんほどのようにお考えか。も大鳥井山遺跡も、安倍氏や清原氏を考えると上でいい話だったと思う。

高橋 学氏
 秋田県横手市の大鳥井山遺跡は10（平成22）年2月22日に国指定を受けた。横手でも今回のようなシンポジウムを行っているが、指定後最初の講演に千田先生に来ていただいた。その時に大鳥井山遺跡も並列的城郭構造とお話いただいた。



コーディネーターを務めた佐川正敏東北学院大教授

戦国期の城郭の知見からというお話で、清原氏一族を中心にいくつかのグループがあり、それが緩やかに連携して柵や館を維持したというお話だった。まさに鳥海柵と同じだと、あらためて確認できた。今後、鳥海柵

浅利英克氏
 遺物から考えると、縦街道南区域と原添下区域には時期差があるようにみえる。縦街道南区域の遺物は多様であり、胆沢城の年代に近い古さを感じる。

佐川正敏氏
 それぞれ中心的な建物が建つ三つの場所がある。建物の年代は柱穴から出てきた土器の年代などで決めていく。建物が同時に存在している可能性について、浅利さんはどう考えているか。

その後、工房の中心は第二沢と第三沢の間、今、東北自動車道の下になっている所に移っている。複数の沢で分断されている所が、有機的に関連するという視点で分立・並列ということを考えていくことは、必要なことであろう。

佐川正敏氏
 最も南の二ノ宮後区域という島状台地には、鉄器を作っていた工房があった。11世紀初頭から長い期間使われた。その時の中心的な建物は、沢を二つ挟んだかなり北側の縦街道南地区にあり、非常に不思議である。



宮城大 大

金ケ崎の国指定史跡 鳥海柵跡

18

考察 全盛期の中心的建物

2017年度シンポジウムより

パネルトーク要旨 I

登壇者

- 千田嘉博氏 (奈良大学教授)
- 本堂寿一氏 (国史跡鳥海柵整備委員会委員長)
- 大平 聡氏 (宮城学院女子大学教授)
- 相原康二氏 (えさし郷土文化館長)
- 高橋 学氏 (秋田県埋蔵文化財センター副所長)
- 箱崎和久氏 (奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室長)
- 浅利英克氏 (金ケ崎町教育委員会)

- コーディネーター 佐川正敏氏 (東北学院大学教授)
- パネリスト